

### 大正大礼の東京府献上品「笠翁式書棚」： 高橋五山の図案と御蔵島産桑をもとにした能 楽模様作品

高橋, 洋子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

60

(発行年 / Year)

2022-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026029>

# 大正大礼の東京府献上品「笠翁式書棚」 —高橋五山の図案と御蔵島産桑をもとにした能楽模様作品—

人文科学研究科 日本文学専攻  
国際日本学インスティテュート  
博士後期課程 2021 年度修了 高橋 洋子

## はじめに

大正4年(1915)11月、大正大礼が国家的行事として盛大に挙行された<sup>1</sup>。明治初年までの旧儀を一新して形づくられた皇位継承儀式である<sup>2</sup>。明治22年(1889)制定の「皇室典範」と明治42年(1909)公布の「登極令」に基づいて実施された<sup>3</sup>。即位礼と大嘗祭(天皇の即位後初めての新嘗祭)などからなり、ほかに年号(元号)をあらためる改元の儀もある。これらの皇位継承に伴う儀式を総括して大礼と称する。

明治維新後、政府が京都から東京に移され、天皇の活動の中心地も東京となった。大正大礼の儀式は京都で挙行されたが、東京市の記録では、「御大礼当日ハ、市中至ル所一段ノ盛観ヲ呈シ、殊ニ宮城前ハ終日人ヲ以テ埋ムル景況ニシテ、其数実ニ百二十万」に達するほど皇居付近には大勢の人が集まったという<sup>4</sup>。即位を祝うため全国から厳選された献上品が1500件以上も寄せられており、広く一般国民も参加するものとなっていた<sup>5</sup>。

ここでは国民が参加した大正大礼を象徴する献上品の例として、大勢の人が関わって作り上げた作品であり、歴史的・文化的な価値が極めて大きく、複数の新聞紙上でも取り上げられた、東京府の献上品「笠翁式書棚」に着目して検討する。

東京府からの献上品は府の図案競技会で一等賞になった、高橋五山の図案「笠翁式書棚」をもとに制作されたものであった。彼の本名は昇太郎であるが、五山と号したので、ここでは、五山で通すこととする<sup>6</sup>。五山の図案「笠翁式書棚」は七つの能面を含む能楽をテーマとした表現に加えて、江戸風のデザインも盛り込まれている。その図案をもとにして府の特産品である御蔵島産の桑を用いて、府立工芸学校の職員生徒や一流職人が書棚の制作を行った。書棚用の褥は府下産の絹糸を使用し、八王子の府立織染学校の職員生徒がそれを手がけた。

本稿では高橋五山が図案を考案するにあたっての個人的および時代的な背景を示し、さらには当時の皇室で能楽を保護奨励していたこととのかかわりについて述べる。加えてこの図案をもとに、多くの制作者の技術と制作への思いなどを含めて作品が完成していくまでの全体像を明らかにする。

明治末期から大正初期は美術概念の転換期で、意匠や工芸の苦境の時代であった。「笠翁式書棚」はこの時代の工芸分野を牽引する代表的な作品であったといえる。

しかしながら、現在、この作品を知る人はほとんどいない。その理由は、現在もなお、皇室の中で使われていると考えられるからである。そのため一般には公開されず、100年以上経った今でも目にすることができない作品となっている。

近代の大正大礼に関する先行研究は、所功著『近代大礼関係の基本史料集成』(2018)があるが、献上品についての詳しい記述はなされていない。黒川廣子著「百年前の東京美術学校による皇室の美術品」(2017)<sup>7</sup>は、東京府の献上品にも言及しているものの、東京美術学校の正木直彦校長や島田佳矣教授らの功績を示す記述となっており、実制作者の視点は取り入れられていない。本稿では本作品の功績は実制作者によるものが大きいことを明らかにする。

筆者は「笠翁式書棚」に関する情報を詳細に調べるために、当時の新聞各紙の記事を基本資料に据えて、その情報の分析を行った。加えて、制作過程に関する全体像を解明するための貴重な資料となる、『美術新報』(1911・1912)、『東京美術学校校友会月報』(1915)、『東京府史』(1933)、橋本義一著『銘木野生桑樹の将来に就いて』(1938)、酒井松吉著「工芸日本一」(1987)、東京都立工芸学校の『工芸学校80年史』(1987)、須田賢司著『木工藝』(2015)などの資料を取り上げて考察した。新聞は以下の記事を引用した。

### <新聞各紙の関連記事>

- 明治45年(1912)2月2日(読売)「家具図案の展覧会」
- 大正4年(1915)8月15日(読売)「結構華麗の献納品 東京府会で決定」
- 同年8月15日(東京日日)「東京府の御大典献納品 御書棚、御卓子と御組椅子」
- 同年8月16日(朝日)「府の奉祝献上品 美術工芸品に決定」
- 同年10月30日(読売)「東京府献上の書棚」
- 同年10月30日(東京日日)「東京府献上の書棚 府立工芸学校で謹製」

## 一 高橋五山考案の意匠

明治44年(1911)の東京府の家具図案募集で、高橋五山の図案が一等となり、それが大正大礼の東京府の献上品の図案に採用された。ここではその経過を紹介し、作品の特徴とその時代背景を述べる。

### 1 高橋五山の図案が選ばれた明治末期の美術の動向

まず、明治末期の美術に関する動向について概略を述べる。明治末期は、絵画、彫刻の評価が高まり、図案(意匠)と工芸分野が不振になった時代である。明治40年(1907)10月に第1回文部省美術展覧会(文展)が開催され、文展は数年のうちに日本の美術界の基軸となっていた。しかし、この文展では図案も工芸も外された。殖産興業を推進する農商務省は、美術全般を産業とみなしていたが、文部省は美術と工芸を区別し、国内における美術の指標として、絵画、彫刻の評価を高めていったのである<sup>8</sup>。

このような美術界の動向による工芸意匠の不振を関係者が憂いて、東京府主催の工芸図案競技会が行われた。明治44年(1911)12月発行の『美術新報』11巻2号に、東京府主催の募集記事が掲載されており、「出品は和洋家具指物」とし、審査の上「其優品は製作家に命じて実物に製造せしむる」とある<sup>9</sup>。「和洋家具指物」の課題に沿って出品された図案の審査結果は、翌45年3月発行の『美術新報』11巻5号に掲載されている<sup>10</sup>。それによると総出品数は約220点で、東京、京都、富山、静岡その他数県からの出品があり、一等は高橋昇太郎(五山)の「笠翁式能面模様書棚」図案で能面模様が施されている作品であった<sup>11</sup>。二等は隅棚(森田潔)他五名で、三等は鏡台(加藤卓爾)他19名であった。

上記の図案募集結果の評価として、明治45年(1912)2月2日の読売新聞に「家具図案の展覧会」という記事が掲載され、美術評論家の黒田鵬心(鵬心生)がコメントしている。

黒田によると、「百数十点の図案が並べて」あり、「数に於いて一番多いのは棚の類」で、「純日本式では一等に高橋昇太郎氏の笠翁式書棚と云ふのがある。左右の高さの差が多すぎると思ふが、模様の意匠は面白く、とにかく凝ったものである」と述べている。

こうした東京府の図案奨励の後押しもあって、大正2年(1913)に全国規模の農商務省図案及応用作品展(農展)が開催されるようになった<sup>12</sup>。この農展は図案が重要視された展覧会であり、工芸分野としては唯一の全国規模の公募展であった<sup>13</sup>。このように大正時代に入って文展と同様に図案制作においても個性や独自性が追求されていくようになったが、五山の「笠翁式書棚」は当時の図案の牽引的役割をはたす作品であった。

### 2 大正大礼の東京府献上品に採用

大正4年(1915)に行われた大正天皇即位の大礼に際し、各道府県がそれぞれに様々な品物を献納した。東京府は大正4年の府会において、過去数年間の一等賞になった図案の中から選考がおこなわれた。その結果、献上品を書棚及び組椅子の図案とすることに「満場一致ヲ以テ」8月14日に協議決定し、その制作費用の予算も組まれた<sup>14</sup>。

この東京府に採用された書棚図案は、明治44年の東京府の図案募集で一等に当選した高橋五山(昇太郎)の「笠翁式書棚」であった。そのことは以下のように多くの報道がなされ話題となった。読売新聞では「結構華麗の献納品東京府会で決定」(1915年8月15日)と題し、「四十四年十月府の図案募集の際一等に当選」した「高橋昇太郎氏の考案を採用」と報じられた<sup>15</sup>。同様の記事が東京日日新聞「東京府の御大典献納品御書棚、御卓子と御組椅子」(1915年8月15日)にも掲載された。さらに書棚が完成した際にも、「高橋昇太郎氏の笠翁式遠州好書棚の意匠図案を基とし」(東京日日新聞:1915年10月30日)と、図案の考案者について紹介がなされている。加えて『東京美術学校校友会月報』(1915年10月)<sup>16</sup>にも、「高橋昇太郎氏の書棚図案を其儘採用する事となり」と明記されている。

黒川(2017)では、大正4年に献上された東京府の書棚の考案を島田佳矣としているが、上記の新聞記事等からそれは間違いで<sup>17</sup>、高橋五山であることは明らかである。

### 3 高橋五山と能楽の関わり

高橋五山(昇太郎)は明治21年(1888)に京都に生まれた。輸出用美術刺繍を家業としていた五山の家では能楽装束なども手がけていたと考えられる。五山は東京美術学校在学中に開催された日英博覧会(1910)に「綴織図案春秋模様」という作品を出品し、褒状を受けている<sup>18</sup>。この作品は綴織という技法を取り入れているところが特徴である。綴織や刺繍の織技や染技は奈良時代にすでにあつたものであり<sup>19</sup>、実用性をはなれた能装束の製作に取り入れられて発達してきた。大礼に採用された五山の書棚図案には能楽表現が取り入れられているが、五山は日英博覧会を通して日本美術に対する見方や感じ方を深め、日本人としての美意識を能楽表現に見出していたのではないかと推察される。日本文化の宣伝でもあつた日英博覧会には、前田家が木彫能面20個と能衣裳27枚を出品しているが<sup>20</sup>、当然ながら、五山はこれらを知っていたと推察される。五山のこのような日英博覧会への出品経験が書棚の能楽表現につながっていったと考えられる。加えて、五山は能や歌舞伎などの舞台芸術に興味を持ち、自宅に能楽師を招くほど芝居好きだった<sup>21</sup>。こういった五山自身の趣向も図案の考案に生かされている。

#### 4 能楽をテーマとして

書棚に取り入れられた能楽の演目とその能面の特徴を述べる。五山の図案について、朝日新聞（1915年8月16日）には「能楽の中から御大礼御式に関係ある五節の舞を含む「国栖」、天下泰平国土安穩を祝すべき「翁」、聖寿無疆を祈る寓意のある「菊慈童」等の模様を笠翁細工にしたもの」と示されている。また読売新聞（1915年8月15日）の記事にも、「能楽国栖翁及菊慈童の三題」から採ったと記述されており、「国栖は御大礼御式に関係ある五節の舞」を含み、「翁は天下泰平国土安穩」を祝し、「菊慈童は聖寿無疆を祈るの意を寓す」と説明されている。同様に東京府の「大正4年の府会」の記述でも「国栖・翁・菊慈童」と示されている<sup>22</sup>。

一方、東京日日新聞（1915年10月30日）では、「翁附嵐山<sup>23</sup>、東北<sup>24</sup>、菊慈童」と記されており、朝日新聞および読売新聞とやや異なるが、いずれにしても、その表現方法は祝賀のための能の演目の世界を表現している意匠図案作品であった<sup>25</sup>。

#### 5 皇室と能楽

皇室と能楽の関係は深いものがある。従来、能楽は将軍をはじめ諸大名が熱心に支援してきており、それは皇室にも受け継がれてきた<sup>26</sup>。大正4年（1915）8月15日の東京朝日新聞に「宮中の能舞台」という記事が掲載された。その内容は、大正大礼での演能に備えて、大規模な能楽堂が宮城内に竣工するというものである<sup>27</sup>。そして同年12月7、8日に祝典演能が催された<sup>28</sup>。朝日新聞の「能楽天覧」（1915年12月4日）の記事によると、7日は翁（観世流）・高砂（金春流）・石橋（宝生流）で、8日は橋弁慶（金剛流）・狂言（三人長者）・羽衣（喜多流）・狸々乱（観世流梅若流）となっている。「翁」を演じた観世元滋は「無上の光栄」と述べている<sup>29</sup>。一方、大正4年11月1日の東京日日新聞には、貞明皇后自作の「千代のかざし」という謡曲の記事が掲載されている。

先述したように、高橋五山の作品は能楽をテーマとしており、皇室が能楽を愛好する嗜好に合致している。書棚は現在も宮中で使用されていると考えられるが<sup>30</sup>、五山の能楽のデザインが皇室に受け入れられたためであろう。

#### 6 江戸風のデザイン

朝日新聞「府の奉祝献上品」（1915年8月16日）の記事には「御書棚は江戸風」と示されており、高橋五山考案の「笠翁式書棚」図案の特徴は、能楽表現に加えて江戸風でもあったことが推察される。

書棚に象嵌された文字については、読売新聞の「結構華麗の献納品 東京府会で決定」（1915年8月15日）の記事に「能面に関係ある曲中より雄大の意味ある文字を光悦本より写し青貝象嵌にて書き表はすものとす」と記されている。ここに光悦とあるのは、桃山から江戸初期にかけての芸術家、本阿弥光悦のことである。光悦はさまざまな分野で優れた足跡を残しているが、観世流謡本などの嵯峨本と称せられる古典の刊行なども知られる。光悦謡本とよばれる、光悦流の書体による古活字出版物の観世流の謡本は<sup>31</sup>、表紙や本文料紙には色変わり料紙や雲母摺り模様などが施されており、その装飾性から美術的価値が高く評価されている。光悦は能書家としても有名で、華麗で装飾性あふれる独自の書風を創出した<sup>32</sup>。五山の「笠翁式書棚」には、こうした日本的意匠の創造者である光悦のすぐれたデザインを作品に取り入れていた様子が見られる。

また「笠翁式書棚」には「遠州好透彫」が施されている。「遠州好み」という名称の由来は江戸初期の茶人、小堀遠州の好みのデザインという意味である<sup>33</sup>。「遠州流」「遠州好み」という言葉は茶道などにおいて現在も使われている。加えて、タイトルにも示されている笠翁式というのは、小川破笠（はりつ）が生み出した、破笠（笠翁）細工のことを指している。日本国語大辞典の「小川破笠」の項では、「江戸中期の漆芸家で、笠翁ともいう」とあり、「光悦風の和風蒔絵に中国趣味を加え、鉛・貝・陶片などを嵌入した漆器は、破笠細工として知られる」と解説されている。それは、一つの素材に異質の素材を嵌入して、その上にさらに細かい文様の蒔絵を凝らすという独特の作風のデザインである<sup>34</sup>。以上のように、高橋五山の図案「笠翁式書棚」の特徴として、本阿弥光悦（1558-1637）、小堀遠州（1579-1647）、小川破笠（1663-1747）といった江戸期に活躍した芸術家への趣向が見出された。

## 二 デザインから作品へ

高橋五山考案の「笠翁式書棚」図案に基づいて、木地に御蔵島の本桑を使用した書棚制作がスタートした。書棚本体の実制作に携わった人たちは、東京府立工芸学校関係者<sup>35</sup>と一流の技量を持つ職人であることが朝日新聞（1915年8月16日）に記されている。以下に書棚の素材や製作者、木工技法などを示す。【表1】

### 1 素材は御蔵島産本桑

大正大礼のため、東京府から皇室に献上することになった書棚には、府下の特産品である貴重材の御蔵島桑を用いることに決定した。御蔵島は明治維新まで伊豆韮山の代官江川太郎左衛門の支配だったが、明治元年に韮山県の管轄となり、明治4年（1871）には足柄県に所属した。ついで明治9年（1876）には静岡県に、さらに11年（1878）に東京府へ移管されてきた<sup>36</sup>。以上のようなめまぐるしい所属の変遷を経て、御蔵島は東京府の管轄になった。

【表1】大正大礼の東京府献上品「笠扇式書棚」に関する情報

新聞各紙（読売・東京日日・朝日）の記事、『美術新報』（1911・1912）、『東京美術学校校友会月報』（1915）、『東京府史』（1933）、酒井松吉著「工芸日本一」（1987）、東京都立工芸学校の『工芸学校80年史』（1987）、須田賢司著『木工藝』（2015）に基づく。

作品名	笠扇式書棚
本作品の図案の考案者	高橋五山（昇太郎）
能の演目	国栖・翁・菊慈童（嵐山・東北・菊慈童）
制作場所	築地の東京府立工芸学校の校内の一室に縄を張り、白衣白袴に斎戒沐浴
書棚の素材と制作法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御蔵島本桑（栗本惣吉が御蔵島桑の調達に尽力）</li> <li>・総桑の足付き書棚、遠州好み透彫、摺り漆塗</li> </ul>
書棚の寸法	高さ二尺九寸五分、前巾二尺五寸、奥行一尺三寸三分 （酒井松吉の回想録：高さ幅共一米、二・三十糎、奥行六十糎）
書棚の制作者	前田桑明・須田桑月・佐藤徳太郎ほか
教員と生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京府立工芸学校の職員7名と生徒10名、石黒校長（監督）</li> <li>・木檜・深見・香取（本体の製図）、宮下・吉川（飾り金具の図案）</li> <li>・山本茗次郎（翁の面）、石黒校長・宮下・山本（前田家にて翁の面を拝見）</li> </ul>
能面の素材と装飾技法など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・白色翁（黄楊木彫）・黒色翁（青銅鑄金）・三光尉（白四分一彫金）</li> <li>増女（陶器）・菊慈童（象牙彫）・姥（乾漆）・大飛手（金の高蒔絵）</li> <li>・能面（薄肉とし木地に嵌し、面付属の模様は蒔絵）</li> <li>・持物の鈴、中啓、唐扇等を点綴</li> <li>・能衣装の紋模様（桜橘・蝶貝・夜光貝等を鏤める）</li> <li>・金具（吉原つなぎ・赤銅製元禄模様透し肉彫）、透しの底（純金張）</li> <li>・笠翁細工、青貝象嵌などの装飾技法</li> </ul>
能面協力者と参考作品	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宝生九郎につき各流儀を表現</li> <li>・前田侯爵家所蔵の「翁、弥勒や大和、河内、備後」等の巨匠の作を参照</li> <li>・小川破笠の作品は津軽旧家のものを参照</li> </ul>
能面補助者	板谷波山（陶器）・三浦柳三郎（拭漆・象牙・貝嵌入）・伊藤乾谷
全体の顧問	東京美術学校の正木直彦（校長）・竹内久一（彫刻科教授） 島田佳矣（図案科教授）・三浦柳三郎（彫刻科嘱託）
書棚用の袴	八王子の東京府立織染学校の教員と生徒、遠州好み緞子

こうして東京府に移管された御蔵島においては、野生桑という銘木が名声を高めていったが、その輸送手段は限られていた。『御蔵島島史』(2006)によれば、明治23年(1890)秋に御蔵島は東京湾汽船と試験的に航海契約を結んだが、年間の航海数は明記されず、一航海の契約料は高額なものであった<sup>37</sup>。大正期から昭和戦前期までの御蔵島への就航は、月に二回の航路がかりうじて維持されたにすぎなかったようである<sup>38</sup>。こうした航路の確保に加えて、桑樹の伐採や搬出は大変な労力と危険を伴う作業だったと考えられる。

一方、吉村武夫著『大江戸趣味風流名物くらべ』(2019)によれば、日本橋の高島屋の裏通りは明治時代まで「東仲通り」と呼ばれ、付近には腕のよい職人が集まっていた。指物師の太田萬吉の店もこの通りにおいて桑材を使用した指物の元祖といわれていた店だった<sup>39</sup>。この店に三宅島出身の前田桑明(文之助)が<sup>40</sup>、明治の中頃に入り、御蔵島の野生桑のことを太田萬吉に話したことがきっかけで桑材が使われるようになったという<sup>41</sup>。

橋本義一著『銘木野生桑樹の将来に就いて』(1938)<sup>42</sup>には、御蔵島産桑は「我が国産随一の銘木として貴重な取り扱ひをなして」いて、「最高の美術工芸用材と為し得るもの」と記されており、前田桑明のことや御蔵島の「笠翁式書棚」を献上したことも紹介されている<sup>43</sup>。

## 2 書棚本体の実作者とその技法

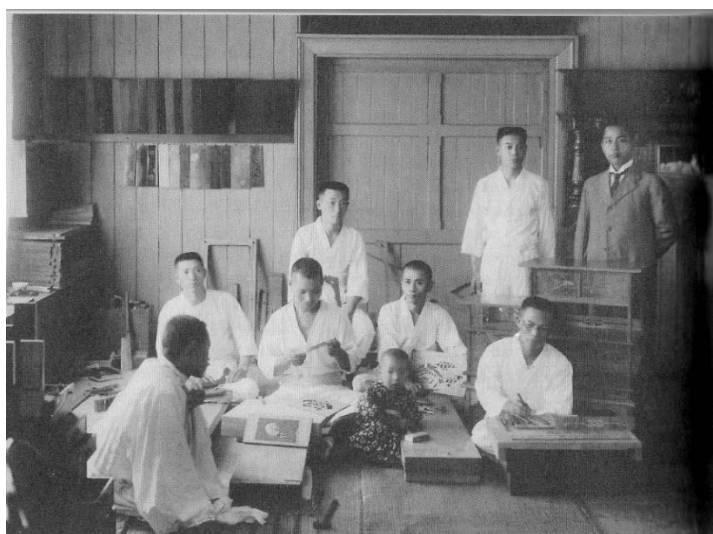
朝日新聞(1915年8月16日)には、「笠翁式書棚」の制作者は築地の東京府立工芸学校(1907年創立)<sup>44</sup>の職員7名と上級生徒10名に加えて、「唐木細工組合から品行方正で第一流の技量を有する職工三名を選抜」したと記されている。その3名は前田桑明とその弟子の須田桑月らであった。須田賢司著『木工藝』(2015)によると、「東京府は御蔵島桑製の書棚を府立工芸学校に下命したが、府立工芸には家具製作科はあったが、和家具科がなかったためこれを桑明に命じた」という<sup>45</sup>。前田桑明の弟子の須田桑月は、このときの笠翁式書棚制作の印象が強く残っていて、珍しい弁当が出たことなどの逸話を子どもに話していたそうである<sup>46</sup>。

前田桑明は木工技術において高い評価を得ていた。明治28年の第4回内国勲業博覧会に出品した御蔵島産桑材の「桑書棚」が宮内省の買い上げ品となり名声を高め、さらに明治45年、第二回東京勲業博覧会に出品した「桑木製六角形厨子」と「桑木製机及文台」が二等賞になるなど、桑材を使った作品が受賞を重ねている<sup>47</sup>。前田桑明は桑材のことを誰よりも熟知し、木工芸界に名を馳せていたことが、大正大礼の献上品の書棚制作者として選ばれ、彼の弟子たちがその制作に大きな支援をなしたと推測される。

この御蔵島産の桑材は「強度、ネバリが最高」で、その製材の仕方で「見方により木の目が変り、銀色の艶」が出て、年を経るごとに「薄い飴色に変化して行き、その肌に何ともいえない味」が出たという<sup>48</sup>。先に述べたように「笠翁式書棚」は御蔵島産本桑に「遠州好透彫」を施し、さらに「摺り漆塗仕上げ」がなされている<sup>49</sup>。「透彫」は文様を彫り抜いて表わす技法であるが、このような高い技術と桑材の美しさが融合した芸術性高い作品を目指していたことが推察される。

一方、書棚用の桑の調達に尽力したのが栗本惣吉であった。彼は御蔵島の桑の製材に関して一家をなし、桑明の活躍を支えていた<sup>50</sup>。笠翁式書棚の東京府立工芸学校での制作風景が写真に残っており、全員齋戒して白装束を身に付けて作業している。背広姿の栗本惣吉も写真に入っている。【図1】

この写真では、栗本の前に置かれている献上品の書棚は、まだ能面は取り付けられていない。別途作業が行われ、書棚に七種の能面装飾が施された。



【図1】東京府立工芸学校内の「笠翁式書棚」作成メンバーと作業風景  
須田桑月(中列左)、前田桑明(中列中)、佐藤徳太郎(後列左)、栗本惣吉(後列右)  
前田桑明が部材を加工している。背広姿の栗本惣吉の前に書棚が置かれている。  
(須田賢司著『木工藝』里文出版、2015年、140頁より)

### 三 共同制作とその文化的影響

「笠翁式書棚」は、各分野の専門家および府立学校の職員や生徒たちが連携し、力を結集して、より良い作品を目指して仕上げられた。本作品は能楽が大きなテーマであり、新聞などでも能の題目や能面制作について詳しく報じられた。書棚に取り付けられた能面は七つあり、それぞれ素材が異なる。新聞記事とあわせて、府立工芸学校の生徒として能面制作に携わった酒井松吉の回想録もみていく。

#### 1 七種の能面の素材と装飾技法

「笠翁式書棚」に取り付けられた七つの能面について、読売新聞「結構華麗の献納品」（1915年8月15日）の記事を以下に引用する。

面は翁を木彫、媼を乾漆、天女を陶器、蔵王権現を蒔絵、菊慈童を牙彫、黒色翁を鋳物、尉を四分一彫金とし、何れも薄肉とし、木地に嵌入す。面に附属したる模様は蒔絵とす。紋模様は本府産の夜光貝象嵌とす。金具は赤銅製元禄模様透し肉彫とし、透しの底は純金張とす。（句読点は筆者による）

以上のように、七つの能面それぞれには、木彫・乾漆・陶器・蒔絵・牙彫・鋳物・彫金が用いられた。さらに装飾として、蒔絵、夜光貝象嵌、元禄模様、透し肉彫、純金張などの装飾技法が取り入れられている。

そして、読売新聞「東京府献上の書棚」（1915年10月30日）には、完成した書棚の写真が掲載された。左右の高さの違う棚に能面が取り付けられた足付き書棚であることが確認できる。同記事によると、書棚の着手は大正4年（1915）8月末日で、能面制作においては陶芸家の板谷波山と東京美術学校教授の三浦柳三郎、伊藤乾谷の補助があったことも記されている。

一方、東京日日新聞「東京府献上の書棚府立工芸学校で謹製」（1915年10月30日）にも、完成した書棚の写真が掲載された。能面制作については、以下のように記されている。

能面は宝生九郎氏に就き各流の義を現し前田侯爵家所蔵の弥勒、天下一大和、同河内、同備後等の巨匠の作を参照し笠翁遺品は津軽旧家の珍藏を参酌したる見事のものなり

と、能面づくりにおいては、宝生九郎にも意見を聞いたことが確認できる。宝生九郎は、当代随一の實力と人氣を誇ったシテ方宝生流能楽師の宝生知栄（ともはる：1837-1917）と考えられる。また前田家では翁だけでなく、弥勒ほかの古い型の能面も参照したこと、津軽旧家で小川破笠の作品も参考にしたこととも述べられている。

以上のように、最善を尽くした様子が読み取れる。

#### 2 卒業生の酒井松吉の回想

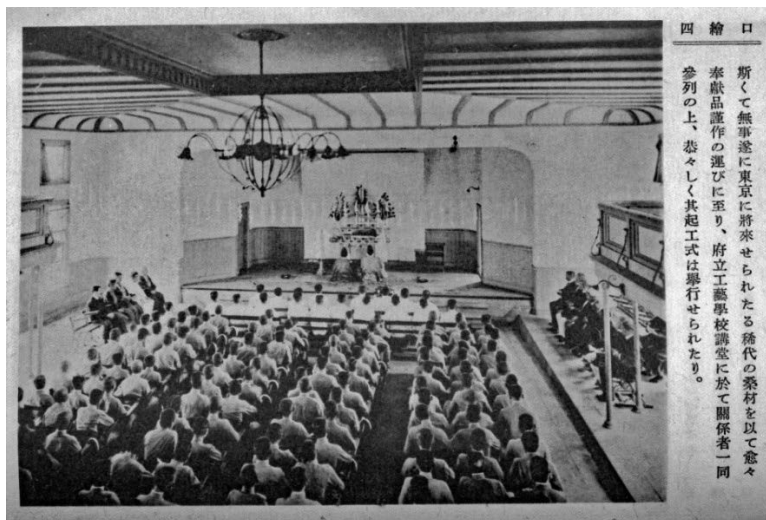
大正2年（1913）に東京府立工芸学校に入学した酒井松吉（1917年卒業）は、献上品の制作に参加した生徒の一人である。彼の回想録「工芸日本一」（1987：88歳）に、学校をあげて献上品の制作にあたったことが詳しく述べられている<sup>51</sup>。『工芸学校80年史』（1987）にも概要が記されているので、以下に引用する<sup>52</sup>。

書棚は高さ幅共一米二・三十糎奥行六十糎設計はF科の木檜・深見・香取先生が当り仕事始めには白衣を身につけて行った。要所に取付ける金具はA科宮下先生の図案で吉原つなぎの赤銅の透かし彫、落としがねは純金板、特に引戸側面等に七個の能面を飾りにつけたがこれの製作法には工芸の粋を集める為木彫・牙彫・彫金・陶器・蒔絵・乾漆・鋳金の工法を網羅した。中で重要な翁の面は鋳金の山本茗次郎（鹿洲）先生が当られたが、前田家秘蔵の黒翁面を特別に拝観をゆるされてこれをモデルに制作した。額と両頬の赤色はブロンズを焼いて緋色発色をさせたが何度もやり直して苦労した。（『工芸学校80年史』1987年）

引戸側面などの飾りに七種の能面をつけたこと、木彫・牙彫・彫金・陶器・蒔絵・乾漆・鋳金の工法を網羅したこと、特に翁の面について苦労して制作したことなどが記述されている。酒井松吉は回想録の中で、山本茗次郎（鹿洲）<sup>53</sup>が担当した黒色翁（青銅鋳金）の制作について、「何度も作り直し焼き直して立派な作品を作り上げた」と回想しており、「その間終始私に、手伝ってくれたまえとのお話で、お手伝い致しましたので、翁の面のことは今でも忘れることができません」と述べている。他の面づくりもそれぞれが苦心して制作していたことを記している。そして「出来上がった書棚を拝見したのですが、私達には二度と見られぬような見事さで、今は宮中に御物となっていることゝ思います」と回想している<sup>54</sup>。

また、献上に先立って東京府は上野で作品を公開展示したので、その豪華さと工芸学校の芸術性・技術力が大評判となり、各方面から記念品の制作依頼が殺到したという<sup>55</sup>。

以上のような、彼らの努力と工芸の技術力の結集によって、豪華な総桑の足付き書棚が完成した。府立工芸学校講堂において関係者一同参列の上、清祓式が挙行された。この時の写真が残されている。【図2】



四 繪 口  
 斯くて無事遂に東京に將來せられたる種代の桑材を以て愈々奉獻品製作の運びに至り、府立工芸学校講堂に於て関係者一同参列の上、恭々しく其起工式は舉行せられたり。

【図2】東京府立工芸学校での「笠翁式書棚」の清祓式風景  
 壇上右奥に書棚が置かれている。東京日日新聞（1915年10月30日）には「来月1日清祓式の上東京府に納入」と記述あり。  
 （橋本義一著『銘木野生桑樹の将来に就いて』私刊、1938年；須田賢司氏より提供）

以上、「笠翁式書棚」はさまざまな分野の人が協力しあって、そこに生徒も加わり、その完成を目指した。日本工芸の技の粋を追求した各ジャンルの工芸家が連携し、高度な彫りや複雑な象嵌技術および江戸時代から受け継がれてきた蒔絵や漆工などによって精緻華麗な装飾が施されて仕上げられた。制作に関わった作品が評価されたときの達成感や喜びは何ものにも代えがたいものだったと思われる。

酒井松吉の回想に見られるように、高い芸術性と技法を生かした美術作品を作ることを目的として、教員と生徒が一体となって取り組んだことは、工芸界が活性化していくための一助となったと推測できる。その作品は、一般市民の評判となり、東京府立工芸学校の評判も高められた。大正大礼の献上品の共同制作というプロジェクトを通して、一人ひとりがそれぞれの役割を果たしながら、文化芸術振興を牽引する重要な役割を担っていたといえるだろう。

### 3 書棚用の褥の作成

書棚用の褥（敷物）の作成に関しては、朝日新聞「府の奉祝献上品」（1915年8月16日）に記されており、その褥は江戸風の「遠州好み緞子」と示されている<sup>56</sup>。そして府下産出の絹糸を精選して、八王子の府立織染学校の職員生徒が制作に従事する、と報じられた<sup>57</sup>。この記事から、書棚用の褥は書棚に合わせた「遠州好み」のデザインが取り入れられたことがうかがえる。

小堀遠州の名が冠された緞子（絹の紋織物）は、五枚綾調の組織で明快に織り出されている点に特徴がある<sup>58</sup>。彼の茶風は装飾豊かで洗練された優美さ、都市的な均衡のとれた瀟洒な美を基本とし、系譜の異なる文化の要素を茶湯のなかに総合しようとするものであった<sup>59</sup>。

#### おわりに

本稿では、大正大礼の東京府献上品「笠翁式書棚」にスポットをあて、従来取り上げられてこなかった作品や作家、団体の再評価を試み、明治の終わり和大正の息吹という時代の狭間の美術工芸の動向も視野に入れた分析を行った。もともとなった図案は、東京美術学校を卒業したばかりの一青年、高橋五山が考案したもので、文展から工芸が外されて農展がはじまる前、つまり工芸が不遇の時代、明治44年の作品である。五山は能楽表現と江戸時代の意匠に関心を持ち、日本の技術と美意識を受け継いで、能楽と江戸時代の美術を融合させた図案を創造した。明治末年の図案の牽引的な役割をはたした作品といえる。

この図案をもとにして、大正4年に皇室への献上品として東京府の予算が組まれて、作品化された。府下の特産品の御蔵島産本桑が用いられ、そこに様々な素材と装飾で表現に工夫が凝らされ、優美な芸術作品に仕上げられた。図案と同様に当時の工芸界をリードする作品であった。それを一番に担っていたのは作品制作に直接携わった、これまであまり注目されてこなかった多岐にわたる分野の人たちである。多くの人たちの努力によって作り上げられた本作品は、国民をあげて祝った大正大礼を象徴するものである。この作品の完成は一般に広く知られることとなり、東京府立工芸学校発展の起爆剤ともなった。

大正大礼に関する先行研究<sup>60</sup>では、「笠翁式書棚」について、顧問であった東京美術学校の正木直彦校長や島田佳矣教授らの功績を強調している。しかしながら、上述したように、本作品は多くの人達の協力で作られられたものであり、実制作した人たちの功績が極めて大きかったといえる。



本作品は当時の皇室と国民を近づけるという役割を果たした。そして、100年以上経た現在に至るまで宮中で使用されており、今もなお皇室と国民をつなぐ存在であり続けている<sup>61</sup>。  
是非、一般公開を願うものである。

## 謝辞

橋本義一著『銘木野生桑樹の将来に就いて』（1938）の資料と工芸学校での作業写真は、木工芸家で人間国宝である須田賢司氏より提供していただきました。能面や演目については、金沢能楽美術館の山内麻衣子氏と石川県立美術館の村上尚子氏にご教示を賜りました。深く御礼申し上げます。

<sup>1</sup> 当初は前年の大正3年に執り行われる予定であったが、同年4月に昭憲皇太后が崩御し一年延期された。

<sup>2</sup> 所功『近代大礼関係の基本史料集成』国書刊行会、2018年、477頁

<sup>3</sup> 所功（注2）360頁。両法令は戦後廃止されたが平成以降の大礼では大正・昭和の大礼を先例として参考にしている。

<sup>4</sup> 東京市役所編『御大札奉祝志』東京市役所、1916年、345頁。大正時代は東京府と東京市が存在していた。1868年に東京府が設置され、東京市は1889年から東京府管下に施行された。東京都となったのは1943年。

<sup>5</sup> 『大札記録』内閣書記官室記録課、1919年、701-703頁

<sup>6</sup> 年間に出版された紙芝居の中から最優秀作品に贈られる「高橋五山賞」（1961創設）に名を残す。

<sup>7</sup> 黒川廣子「百年前の東京美術学校による皇室の美術品」『皇室の彩：百年前の文化プロジェクト』美術出版社、2017年、23-32頁

<sup>8</sup> 佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、1999年、35-39頁。並木誠士他『京都伝統工芸の近代』思文閣出版、2012年、201頁

<sup>9</sup> 『美術新報』11巻2号、画報社、1911年12月、30頁

<sup>10</sup> 『美術新報』11巻5号、画報社、1912年3月、170頁。『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇：第2巻（ぎょうせい、1992年、528頁）には本来あるべき一等の受賞者名と二等の文字が欠落して森田潔ら5名が一等と読める。誤植である。

<sup>11</sup> 高橋昇太郎（五山）は明治44年東京美術学校図案科卒、猶予の兵役で軍隊生活を2年間おくる。卒業時は2学年下の森田潔（但山）と共同生活をしており、書棚図案は明治43年末頃には完成し応募は但山（2等当選）に依頼したと推察。五山は「後事を全部但山君に依頼して伏見の入営に駆け付けた」（高橋五山「画家生活の二十年」『但山画譜』漢画研究会、1921年、20頁）と記しており、但山は「御大典記念品献納の光栄に浴されたる友人高橋五山君」（『新幼年』創刊号、新幼年社、1916年）と書いている。

<sup>12</sup> 岡達也「文展と農展」『図案からデザインへ近代京都の図案教育』淡交社、2016年、76頁

<sup>13</sup> 農展は大正14年（1925）に主催者が商工省へとかわり商工省展として昭和14年まで続けられた。文部省主催の展覧会に工芸部門が加わるのは昭和2年（1927）から。

<sup>14</sup> 『東京府史』府会篇、第6巻、1933年、3-5頁。その制作費用は概算八千円位。読売新聞「結構華麗の献納品東京府会で決定」（1915年8月15日）にも記述。

<sup>15</sup> 読売新聞記事の「森谷清方」は「森田潔方」の間違ひと思われる。

<sup>16</sup> 『東京美術学校校友会月報』14巻5号、1915年10月、79頁

<sup>17</sup> 黒川廣子（注7）は、東京日日新聞「東京府献上の書棚」（1915年10月30日）と『東京美術学校校友会月報』14巻5号を参照しているが（24頁）、島田佳矣の考案と記述している（28頁）。

<sup>18</sup> 『日英博覧会授賞人名録』農商務省日英博覧会事務局、1910年、14頁（綴織図案春秋模様）。美校在学中の高橋五山は東京瓦斯意匠懸賞「菖蒲式瓦斯燈釣金具図案」（1908）が一等になるなど高い評価を得ていた。

<sup>19</sup> 奈良時代の綴織當麻曼荼羅（8世紀）（国宝、奈良當麻寺蔵）などがある。

<sup>20</sup> 『日英博覧会古美術出品図録』日英博覧会事務局、1910年、56-58頁（第191～194に木彫能面写真掲載）、122-125頁。

『日英博覧会事務局事務報告 上巻』農商務省、1912年、362-363頁、413-415頁

<sup>21</sup> 五山の長女せい子は能を学び、観世流緑泉会「養老」（杉並能楽堂1960年3月）の舞台に立つ（高橋洋子編著『教育紙芝居集成：高橋五山と「幼稚園紙芝居」』249頁）参照。

<sup>22</sup> 『東京府史』（注14）4頁

<sup>23</sup> 桜の木を守護する木守、勝手の二神が舞を舞い、蔵王権現が現れて国土の守護を誓い、栄えゆく春を寿ぐ（能楽協会の能楽事典、曲目データベース「嵐山」参照）。

<sup>24</sup> 和泉式部を主人公とした能。京都東北院の梅の花を見て感じ入っている僧の前に一人の女性が現れて、それは和泉式部の愛した軒端の梅と由緒を語り、式部の霊と名乗り消えてしまう。その夜の僧の夢に和泉式部は美しい本体を現し、優雅な舞を舞う（能楽協会の能楽事典、曲目データベース「東北」参照）。

<sup>25</sup> 「国栖」も「嵐山」もどちらも「大飛出」を用いる。梅の意匠などがあれば、「東北」がしっくりくるという。金沢能楽美術館学芸員の山内麻衣子氏にご教示を賜った（2021年11月20日に電話とメールで確認）。

<sup>26</sup> 明治維新で保護者を失った能役者の多くは廃業、転業を余儀なくされた。ワキ方や囃子方、狂言方には断絶した流儀もあったが、外国の芸術保護政策の影響を受けて国家の伝統芸術の必要性を痛感した政府や皇室、華族、新興財閥の後援などによって、能楽は息を吹き返した（公益社団法人能楽協会「能楽の歴史」：2022/5/1閲覧。  
(<https://www.nohgaku.or.jp/encyclopedia/whats/history.html>)

- 
- <sup>27</sup> 大正4年12月7、8日の祝典演能の後、翌年取り壊されて華族会館に下賜された。
- <sup>28</sup> 朝日新聞「能楽天覧」(1915年12月4日)、読売新聞「御代始能第二日昨夜の宮中御宴」(1915年12月9日)。
- <sup>29</sup> 読売新聞「天覧の御能楽 二千五百名に陪観の榮を賜う」(1915年12月6日)。観世流の新作能「大典」は大正天皇御即位を祝して作られた。
- <sup>30</sup> この書棚は「献上されたものであり現在も宮中にあるのだろう」(2021年10月20日、三の丸尚蔵館深澤氏に電話で確認)、「皇居の中にある可能性が大きい」(2021年11月18日、宮内庁大塚氏に電話で確認)とのこと。
- <sup>31</sup> 美的意匠の装訂を施して出版した豪華本。光悦本・角倉本ともいわれる。光悦流の総合工芸美術の精華というべきもので、世界の美的豪華本中にも類い稀な逸品と高く評価される(国史大辞典「嵯峨本」)。
- <sup>32</sup> 桃山から江戸初期にかけての芸術家。京都の人。近衛信尹、松花堂昭乗と並んで「寛永三筆」と称された(日本大百科全書「光悦の芸術」)。
- <sup>33</sup> 小堀遠州(1579-1647)江戸時代前期の大名、茶人。遠州流茶道の祖(日本人名大辞典)。
- <sup>34</sup> 京都国立博物館「江戸時代の蒔絵と笠翁細工」:2022/5/1閲覧。  
(<https://www.kyohaku.go.jp/jp/dictio/shikki/63edo.html>)
- <sup>35</sup> 明治40年に東京府立工芸学校創立、家具製作科の本科(高小卒4年制)及び選科(高小卒2年制)は一年遅れで発足し、明治45年3月第一回卒業生を出す(『卒業生の足跡にたどる工芸学校の90年』築地工芸会、1997年、84頁)。
- <sup>36</sup> 栗本俊吉著刊『御蔵島概況』、1900年、9頁。『御蔵島島史』東京都御蔵島村、2006年、428頁
- <sup>37</sup> 『御蔵島島史』東京都御蔵島、2006年、553頁
- <sup>38</sup> 『御蔵島島史』(注37)559頁
- <sup>39</sup> 吉村武夫『大江戸趣味風流名物くらべ』平凡社、2019年、352-353頁
- <sup>40</sup> 吉村武夫(注39)は御蔵島出身とあるが、諸山正則「御蔵島の銘木桑材と前田桑明」(『日本の美術』(303)ぎょうせい、1991年8月、94頁)、斎藤潤『東京の島』(光文社、2007年、157頁)、須田賢司『木工芸 清雅を標に』(里文出版、2015年、129頁)に、前田桑明は三宅島神着村出身と記述あり。
- <sup>41</sup> 吉村武夫(注39)352-353頁、須田賢司(注40)134頁
- <sup>42</sup> 橋本義一著刊『銘木野生桑樹の将来に就いて』私刊、非売品、1938年(題簽付口絵5丁本文8丁)。不幸にして美術指物界の巨匠前田桑明の功績が記録に洩れていると指摘。
- <sup>43</sup> 「東京府より奉献の御調度品も御蔵島産桑材を以て謹製せられた」(6丁裏)。昭和大礼でも御蔵島産の桑が使われた。
- <sup>44</sup> 東京都立工芸高等学校の前身。
- <sup>45</sup> 須田賢司(注40)139-140頁。諸山正則(注40)94頁も参照。須田賢司氏は重要無形文化財「木工芸」保持者(人間国宝)で須田桑月は祖父。
- <sup>46</sup> 須田賢司(注40)140頁
- <sup>47</sup> 諸山正則(注40)94-97頁
- <sup>48</sup> 吉村武夫(注39)353頁。西川栄明『樹木と木材の図鑑』創元社、2016年、197頁
- <sup>49</sup> 『東京府史』(注14)4頁
- <sup>50</sup> 須田賢司(注40)138頁
- <sup>51</sup> 酒井松吉「工芸日本一」『築地万年橋』築地工芸会80周年記念誌編集委員会、1987年、1-5頁
- <sup>52</sup> 『工芸学校80年史』築地工芸会、1987年、39頁
- <sup>53</sup> 山本鹿洲(東京美術学校鑄造科明治30年卒)は「岡崎雪声(鑄造師、彫金家)の美校当時よりの愛弟子で、鑄物に関する限り何でもこなす先生でした」(酒井松吉「工芸日本一」(注51)2頁)。
- <sup>54</sup> 酒井松吉(注51)3-4頁。『大正4年大札録』に「御大典ニ付府民奉祝献納品ノ誠意ヲ表スル為メ別紙目録ノ通御書棚外四点献上致度候條御執奏相成度此段稟申候也」(大正4年10月23日)と記録あり。
- <sup>55</sup> 酒井松吉(注51)4頁
- <sup>56</sup> 朝日新聞「府の奉祝献上品 美術工芸品に決定」(1915年8月16日)。読売新聞「結構華麗の献納品」(1915年8月15日)。『東京府史』(注14)3-5頁
- <sup>57</sup> 同校は明治20年織物染色講習所に発し、28年八王子染織学校と改まり36年に東京府に移管、東京府立織染学校と改称(『日本工芸名鑑』上編、美術日報社、1929年、13頁)。
- <sup>58</sup> 日本大百科全書「遠州緞子」参照。
- <sup>59</sup> 国史大辞典「小堀遠州」参照。
- <sup>60</sup> 黒川廣子(注7)23-32頁
- <sup>61</sup> この書棚は現在も使われていると考えられる(注30)。